

唯識に関する一私見

——「心意識の問題」と「唯識三年、俱舍八年」について——

舟 橋 尚 哉

はじめに

最近、唯識思想について興味を持ち、研究する学者も多くなった。また卒業論文のテーマを唯識に求め、「唯識三性説」や「阿頼耶識」や「末那識」などに関する論文も多い。唯識思想の研究の進展を望むものにとって、誠に喜ばしいことと思う。

新進気鋭の学者たちは、それなりに成果をあげ、これからも期待できるとして、気になるのは学生の卒業論文に対する取り組みである。確かに年々就職試験が早くなり、どうしても浮き足立って、じっくり論文の資料集めをして、論文を書くこともむずかしい状態である。

今年から就職協定も廃止され、企業によつては連休前から来年卒業予定の学生の求人募集をしているところもあり、現に四月中旬に、私のゼミの学生が企業の第一次試験があるから、明日の授業は欠席させて頂きたいと申出てきたので、私はびつくりした。

そうなると、就職の内定が早く取ればよいが、いつまでたっても就職が決まらなければ、四月から半年位、就職

活動に明けくれて、結局、論文に専念する期間が短くなり、不本意な卒業論文を書いてでも、何とか卒業だけはしようとする学生が増えてくるのは当然である。

そういう時に、「唯識三年、俱舍八年」の諺を引用して、唯識は「俱舍の勉強を八年しておけば、唯識は三年で済む^①」というから、唯識の学は十一年もかかる。従ってゼミへ入って二年やそこらで唯識の論文は書けるはずがない。そこで不十分な論文でも何とか通して下さいといわんばかりに、この「唯識三年、俱舍八年」の諺が引用されるのである。

そこで「唯識三年、俱舍八年」というときに、本来、唯識は俱舍八年を学んでおれば、唯識は三年ですむ、すなわち十一年かかるという意であったのかどうか。少し考えてみようと思つたわけである。

それともう一つ、「心」「意」「識」は唯識ではそれぞれ「阿頼耶識」「末那識」「六識」の順に相当するが、そうでない解釈もあるというので、以前からこの問題も考えてみようと思つていたので、ここに「唯識」の「識」(vijñapti)の問題を考察する中で、合わせて再検討できればと思つている。

一 心意識の問題

わが町の豊橋別院では、毎年七月下旬には豊橋仏教会の主催で暁天講座が三日間、朝六時より七時まで行なわれている。

昭和六十三年七月三十日には、愛知学院大学教授、文博の鈴木哲英先生が「禪の心」という講題のもとで約一時間の法話があった。その時、「心意識」について、心は第六識、意は第七識、識は第八識に相当するといわれたように思つたので、私は思わず、「心は第八識、意は第七識、識は第六識に相当するのではないか」と質問の時間に言おうと思つたが、仏教会の高僧方や私の寺の檀家の人も多く参加しているし、朝の早い時間なので、この講座が終り次第、

会社に向かう人もいるので思い、質問をやめ、自坊に帰ってすぐに望月大辞典を調べてみた。

すると唯識では、私の考えるような「心意識」の解釈が一般的であるが、『佛性論』には、「心を六識心、意を阿陀那識、識を阿梨耶識に配し」とあり、そのような解釈があることを初めて知った。それ以来、何故このような解釈の違いが生じたのか、大変気になっていた。そこでこの問題について若干考察してみようと思う。

二 原始仏教における心意識

この問題については、すでに拙著『初期唯識思想の研究』^②四六頁以下でも論じたように、原始仏教經典の中に、心意識が語られるものとして、『相應部經典』があげられる。

「比丘等よ、この心とも意とも識とも呼ぶものに無聞の凡夫は厭意を生ずること能わず」

Yaṃ ca kho etaṃ bhikkhave vuccati cittaṃ iti pi mano iti pi viññānaṃ iti pi || tatrasuttavā puthujāno nālaṃ nibbinditum nālaṃ virajjitaṃ nālaṃ vimuccitum || (Samyutta-Nikāya II p. 94)

「而於心意識。愚癡無聞凡夫。不能厭離欲解脱」(大正二、八一C)

とか

「比丘等よ、されど此の心とも意とも識とも呼ばれるものは、日夜に〔転変して〕異を生じ異を滅す」

Yaṃ ca kho etaṃ bhikkhave vuccati cittaṃ iti pi mano iti pi viññānaṃ iti pi ||

taṃ rattiyā ca divasassa ca aññad eva uppajjati aññaṃ nirjhati || (Samyutta-Nikāya II p. 95)

「心意識 日夜時尅。須臾転変。異生異滅」(大正二、八一C)

とか

「比丘等よ、それと同じく此の心とも意とも識とも呼ばれるものも、また日夜に〔転変して〕異を生じ、異を滅

す]

Evam eva kho bhikkhava yad idam vuccati cittam itī pi mano itī pi viññanam itī pi ||

taṃ ratīyā ca divasassa ca aññad eva uppajjati aññam nirujjhati || (Samyutta-Nikāya II p. 95)

「彼心意識。亦後如是。異生異滅」(大正二、八一C)

という記述がある。これらの記述は互いに関連して、連続して説かれており、漢訳では「心意識」とあるが、パーリ文によれば、

「心とも意とも識とも呼ばれるもの」(vuccati cittam itī pi mano itī pi viññanam itī pi)

となっている。従ってここには心と意と識との上に区別はなく、同義異語として説かれているように思われる。

三 『大毘婆沙論』『俱舍論』などにおける心意識

ところが『大毘婆沙論』卷七十二には、

「問諸契經中説心意識。如是三種差別云何。或有説者。無有差別。心即是意。意即是識。此三声別義無異故。如火。名火。亦名焰頂。亦名熾然。亦名生明。亦名受祀。亦名能熟。亦名異路。亦名鑽息。亦名烟幢。亦名金相。如是是一火有十種名。声雖有異。而体無別」(大正二七、三七一上)

とあって、諸契經中には「心意識には差別なし」とあり、「心即是意、意即是識」であるから、「三声別義無異故」(大正二七、三七一上)と説かれている。

そして続いて次の如く説かれている。

「声雖有異。而体無別。如対法中説名受名受。亦名等受。亦名別受。亦名覺受。亦名受趣。如是。一受有五種名。声雖有異。而体無別」(大正二七、三七一上—中)

ここには心意識の体は差別なしと説かれていることになる。

ところがその直後には、次のように説かれる。

「復有_レ説者_一。心意識三亦有_二差別_一。謂名即差別。名_レ心名_レ意名_レ識異故。復次世亦差別。謂過去名_レ意。未來名_レ心。現在名_レ識故。復次施設亦有_二差別_一。謂界中施_二設心_一。處中施_二設意_一。蘊中施_二設識_一故。復次義亦有_二差別_一。謂心是種族義。意是生門義。識是積聚義」(大正二七、三七一中)

とあって、「心意識の三に差別あり」と説かれている。

このように『大毘婆沙論』では「有_二説者_一」といって、「心意識に差別なし」という説と、「心意識に差別有り」という説との、両者の説をあげている。

ところで『俱舍論』の立場はどうであろうか。『俱舍論』巻四では、

「頌曰

心意識_{トトトハ} 体_{一ナリ}

心_ト心_ト所_ト 有_レ依_ト

有_レ縁_ト有_レ行_ト相_ト

相_{トナリ} 義_レ有_レ五_一」(大正二九、二二下)

とあって、「心意識は体一である」と説かれている。『俱舍論』ではこの偈を解釈して、

「論曰。集起故名_レ心。思量故名_レ意。了別故名_レ識。復有_二釈言_一。淨不淨界種々差別故

名為_レ心。即此為_レ他。作_二所依止_一。故名_レ為_レ意。作_二能依止_一故名_レ為_レ識。故心意識三名所_レ詮。義雖_レ有_レ異而体是

一」(大正二九、二二下)

と説かれているから、心意識は「義はそれぞれ異なるけれども体は一である」ということになると思う。

そのことは、これに相当する梵文の註釈でも明らかである。

ekārtham iti. yaccitram tad eva manas tad eva vijñānam ity ekārtho syety ekārtham (U. Wogihara: Abhidharma-kośavyākhyā, Yaśomitra part I, p. 141)

「体が一であるとは、心なるもの、それが意であり識であるから、体が一であるというのが ekārtham である」
このように『俱舍論』には「心意識は体一である」と説かれているが、『顯宗論』の偈頌は『俱舍論』の偈と同じであるから、『顯宗論』巻六にも、

「心意識体一 心心所有依

有縁有行相 相應義有五」(大正二九、八〇三上)

とあり、「論曰。心意識三体雖是一。而訓詞等類有異」(大正二九、八〇三上)と説かれている。

四 唯識思想における心意識

それでは唯識思想の上では、心意識はどのように説かれているのであろうか。

瑜伽行派の所依の經典といわれる『解深密經』には、心意識相品第三において、

「爾時広慧菩薩摩訶薩白仏言。如二世尊説。於心意識秘密善巧。菩薩於心意識秘密善巧菩薩者。何名爲於心意識秘密善巧。菩薩」(大正一六、六九二上—中)

とあり、「於心意識秘密善巧」とあるのみで心意識の差別は説かれていない。これは『解深密經』では、

「広慧。此識亦名阿陀那識。何以故。由此識於身 隨逐執持故。亦名阿頼耶識。何以故。由此識於身 攝

受藏隱同安危義故亦名爲心。何以故。由識色声香味触等積集滋長故。広慧。阿陀那識爲依止爲建立故

六識身軀」(大正一六、六九二中)

とあって、「阿陀那識とも名づく、阿頼耶識とも名づく」とあり、「その阿陀那識を依止して六識身が転ずる」といわれているから、七識のみしか説かれていない。すなわち、末那識が説かれていないから、従って心意識を後の唯識思想のように、第八阿頼耶識、第七末那識、六識に当てて考えることはできない。

ところが『瑜伽論』になると、心意識は阿頼耶識、無間滅の意・染汚の意、六識に相当している。『瑜伽論』巻一には、

「意の」自性とは何かといえは、心と意と識とである。心 (citta) とは何かといえは、一切の種子を具するもの、依止のものを具するもの、依止なるものとして住しているもの、執受 (upādān) が異熟所撰の阿頼耶識である。

意 (manas) とは何かといえは、六識身の無間に滅したものと、常に「我」癡、我見、我慢、「我」愛の四煩惱の相と相應せる有染汚の意とである。

識 (vijñāna) とは何かといえは、所縁を了別するとき、現前せるものである」(V. Bhattacharya: The

Yogācārahūmi Part I p. 11, University of Calcutta 1957)

これに相当する『瑜伽師地論』本地分中意地第二之一には、

「云何意自性。謂心意識。心謂一切種子所隨依止住。所隨^{依附}依止性。体能執受。異熟所撰阿頼耶識。意謂恒行意及

六識身無間滅意。識謂現前了別所縁境界」(大正三〇、二八〇中)

とあって、やはり心意識が阿頼耶識、無間滅意、六識に相当している。

『瑜伽師地論』卷六十二、撰決拈分中有心地にも

「云何名爲勝義道理。建立差別。謂略有二識。一者阿頼耶識。二者轉識。阿頼耶識是所依。轉識是能依。此

復七種。所謂眼識乃至意識」(大正三〇、六五一中)

とあり、またそれを説明して、

「復次此中諸識皆名ニ心意識。若就ニ最勝。阿頼耶識名ノ心。何以故。由ニ此識能集ニ聚一切法種子。於ニ一切時ニ縁ニ執受境。縁ニ不可知 一類器境。末那名ノ意。於ニ一切時ニ執ニ我所及我慢等ニ思量為ニ性。余識名ノ識。謂於ニ境

界ニ了別為ニ相」(大正三〇、六五一中)

とある。ここには「阿頼耶識名ノ心」「末那名ノ意」「余識名ノ識」とあるから、明らかに心意識はそれぞれ阿頼耶識、末那「識」、六識に相当している。

このことは『大乘莊嚴經論』功德品第七十六偈の長行でも同じであり、

「此の中、心とは阿梨耶識であり、意とはそれを阿梨耶識を、所縁とする我見等の相應法を有するもの、識とは六識身である」^③

tatra citamālayavijñānam | manas tadālambanam ātmadīpādīśanyuktam vijñānam śaḍvijñānakayāḥ | (Lévi

本 p. 174. l. 16)

とあるから、「心」「意」「識」をそれぞれ「阿頼耶識」「末那「識」」「六識」に当てるのは唯識論書の共通の考え方であると思われる。

ところが『佛性論』(天親菩薩造、真諦訳)だけは、『佛性論』第三、辯相分第四中総撰品第五に、

「釈曰。心者即六識心

意者、阿陀那識

識者、阿梨耶識」(大正三二、八〇一C)

と説かれていて、一般にいわれる「心は阿頼耶識」「意は末那識」「識は六識」に相当するという唯識論書の解釈とは異なる。これはどう理解すればよいであろうか。

この文について、武邑尚邦博士は「仏性論研究」の中で、

「この心意識の解釈は真諦訳の他の論書にはない」^④

とっておられる。釈曰とあるから、これは真諦の解釈であろうが、どうしてこういう解釈がなされたのかよくわからない。

そのことは『成唯識論』巻五でも、

「第八名心。集諸法種一起諸法故。

第七名意。緣藏識等恒審思量為我等故。

余六名識。於六別境能動間斷了別轉故」(新導本『成唯識論』巻五、九右)

とあり、続いて『楞伽伽陀』を引用している。

「藏識説名心。思量性名意。

能了諸境相。是説名為識」(同書巻五、九右)

このように心は第八識・阿頼耶識、意は第七識・末那(識)、識は六識・了別であるとするのが一般的である。

天親菩薩造、真諦訳『佛性論』に見られる「心者即六識心。意者阿陀那識。識者阿梨耶識」(大正三一、八〇一C)という独特の解釈はどこからくるのであろうか。

真諦訳『摂大乘論』に「意有二種」といって、一は「先滅識為意」(大正三一、一五八上)といい、「二有染汚意」(一五八上)とあって、後者の意を解釈して「釈曰。此欲釈阿陀那識」(大正一五八上)といているから、これは『佛性論』の「意者、阿陀那識」(大正三一、八〇一C)と一致している。

ただ後の「心者六識心」「識者阿梨那識」という考え方の源流がわからないが、「心者即六識心」といって、「六識身」といわず、「心」といっているところと、「識者阿梨耶識」といっているところに、「心」「意」「識」を「六識」

「阿陀那識」「阿梨那識」に当てる独特の解釈を生ずる謎があるのかもしれない。

五 『唯識二十論』『唯識三十頌』『大乘莊嚴經論』における心意識の問題

次に『唯識二十論』の第一偈^⑤には、

「大乘の為に三界が唯記識 (vijñapinātra) なることを安立す。経中に『噫哉、諸聖者子よ、この三界は唯心なり』と説くが故に、心 (citta) 意 (manas) 識 (vijñāna) 及び了別 (vijñapti) というは同義異語なり」(第一偈 a — b)

ここでいう「経中に」というのは『十地経』のことであり、『十地経』には次の如く説かれている。

「彼(菩薩)は次の如く考ふる。この三界に属するもの、これは唯だ心のみ(唯心)である。」

tasyaivam bhavati | cittaṃātram idaṃ yad idaṃ traidhātukam |

「即此菩薩作是思惟。所言三界此唯是心」(大正一〇、五五二a)

『十地経』では「三界唯心」と説かれていたが、『唯識二十論』では「心・意・識・了別」は同義異語であると説かれているから、ここに「唯心」と「唯識」とが同じような意で用いられることの根拠が示されたものと思う。

この『唯識二十論』のこの表明は唯識思想を考ふる場合、まことに重要であると思う。従って「心・意・識及び了別は同義異語なり」というのが、『唯識二十論』の「心・意・識」に対する立場である。

次に『唯識三十頌』には、第二十八偈に次の如く説かれている。

「爾らば何時、識の取を断じ、そして唯心性 (cittamātrata) 中に安住することとなるのかといえは、それ故に、

『然るに智 (jñāna) が所縁を決して了得せざるとき、そのときは唯識性 (vijñapinātrata) 中に安住する。所取なきときには、それを能取せざる故に』(第二十八偈)^⑦

ここには、長行の上では「唯心性 (cittamātrata) 中に安住する」といいながら、偈文の上では「唯識性 (vijñāpimātrava) の中に安住する」と説かれている。従ってここでも「唯心性」と「唯識性」とは同じ意味で使われていると思う。

それでは世親以前では、「唯心」と「唯識」とはどのように用いられていたであろうか。

『大乘莊嚴經論』には、「唯心 (cittamātra)」を説く記述が多いが、すでに論じたことがあるのでここでは省略する。ただ『大乘莊嚴經論』求法品第三十四偈には、次の如き興味ある記述がある。

「唯識 (vijñāpimātrata) を求めるについての二偈

『心は二として顕現する。貪等の顕現も信等の顕現も、その如くであるといわれる。それより他に染汚と善との法はない』(第三十四偈)

二の顕現は唯心 (cittamātra) のみであるといわれる。所取の顕現と能取の顕現とである」

ここには「唯識 (vijñāpimātrata) を求めるについて」と長行ではいわれているのに、偈頌では、『心は二として顕現する』(第三十四偈 a) といい、その後の長行では「二の顕現は唯心 (cittamātra)」と説かれている。

一見、この記述は『大乘莊嚴經論』でも、「唯心」と「唯識」とが全く同じ意に使われていて、そこには何らの區別もないようにも見えるが、しかし『大乘莊嚴經論』の偈頌の上では一度も、vijñāpimātra (唯識) という語は用いられておらず、cittamātra (唯心) のみが用いられている。^⑩

このことは『大乘莊嚴經論』の偈頌に、たまたま vijñāpimātrata が使われなかっただけなのか、あるいは偈頌の成立のときには、まだ vijñāpimātra という語が成立していなかったのか、興味ある問題である。(私は『大乘莊嚴經論』の偈頌の方が、長行の部分より成立が早いと考えているから、偈頌では vijñāpimātra を使わず、cittamātra を用いたと考えるのであるが、偈頌と長行とはほぼ同じ頃成立したと考える学者も多いので、この問題は再考の余地

がある。

このことは vināpīmatra (唯識) という語が『瑜伽論』本地分には見出されず、従って『解深密經』の分別瑜伽品あたりで最初に用いられたのではないかといわれることと関連して、今後の課題の一つであろう。

以上で「心意識の問題」に関する考察を一応終わり、次に「唯識三年、俱舍八年」の問題について考察してみようと思う。

六 「唯識三年、俱舍八年」の問題

いつ頃からいわれるようになったのか、よくわからないが、「唯識三年、俱舍八年」という諺をよく聞く。

最近、高崎直道先生が「講座・大乘仏教Ⅷ、唯識思想」に、

「よく『唯識三年、俱舍八年』ということばを耳にする。その意味は、筆者が学生時代に聞いて記憶していることに間違いがなければ、俱舍の勉強を八年しておけば唯識は三年で済むということの由で、結局、唯識の学をものにするには十一年かかる」¹²⁾

といわれて以来、学生たちは卒業論文にこれを引用して、唯識の学は十一年もかかるから、ゼミで二年位学んだだけでは、十分な論文が書けるはずがない。そこでこんな卒業論文でも、何とか通して下さいといわんばかりに哀願するような論文もある。

そこで、はたして「唯識三年、俱舍八年」というのは、元々、唯識は十一年もかかるというのが、本来の意味であったのかどうかを一度検討してみたいと思っていたので、ここに考察することにした。

「唯識三年、俱舍八年」というから、もし俱舍を八年学んだ後に、唯識を三年学ぶのであれば、一般的には「俱舍八年、唯識三年」というのが自然ではなからうか。という疑問から出発した。確かに「桃栗三年、柿八年」というか

ら、「〇〇三年、〇〇八年」という方が語呂はよいのであろう。

そこで私の父（舟橋一哉）は「唯識三年、俱舍八年」というのは、「桃栗三年、柿八年」をもじったもので、「唯識は三年かかるが、俱舍は八年かかる」といつて、いずれも難解な学問であることを表明したもので、『成唯識論』十巻で三年かかるのなら、『俱舍論』は三十巻あるから、その三倍の九年かかるはずなのに、一年おまげがしてあって、八年となっているのであると、よくいつていたことを思い出したわけである。

確かに「唯識」は「俱舍」のように、法相を一通り知っただけでは、なかなか理解しがたい。その上、般若の空思想を踏まえているから、通り一辺の理解ではなかなか真意がわからない。その点からいえば、唯識の方が俱舍よりも難解でむつかしいともいえる。

しかし私は「唯識三年、俱舍八年」というのを、すなおに理解すれば、「唯識は三年かかるが、俱舍は八年かかる」ということになると思う。そこで唯識学で用いるテキストと俱舍学で用いるテキストに注目し、これを較べてみた。

「唯識」といえば護法の『成唯識論』で玄奘訳十巻であり、「俱舍」といえば世親の『阿毘達磨俱舍論』で玄奘訳三十巻のことである。

そうすると、昔から「唯識三年、俱舍八年」というのは、冠導本（現在は新導本が一般的であるが）『成唯識論』や冠導本『阿毘達磨俱舍論』を解説し、講読するときに、三年ないし八年かかるという年数ではないかと思ひ、両者の分量を調べてみた。

まず手許にあった大正大藏経で調べてみると、護法『成唯識論』十巻（玄奘訳）は大正大藏経三十一巻、一頁一六頁で約六十頁である。また世親の『阿毘達磨俱舍論』三十巻（玄奘訳）は大正大藏経二十九巻一頁一頁五十九頁で、約百六十頁である。

仮りに一年間で二十頁位進むとすれば、『成唯識論』は六十頁を一年間で進む二十頁で割れば、三年ということに

なり、『唯識』は三年かかることになる。

また『阿毘達磨俱舍論』は百六十頁であるから、一年間で進む二十頁で割れば、八年ということになり、『俱舍』は八年かかることになる。これは「唯識三年、俱舍八年」の諺の年数と全く合致している。

このことは手許にある新導本『成唯識論』と冠導本『阿毘達磨俱舍論』の上でもいえることであり、『成唯識論』は（本文四六二頁、後序他で一六頁で合計四七八頁）約四八〇頁であり、『阿毘達磨俱舍論』は一二八〇頁である。仮りに一年で一六〇頁位進むとすると、『成唯識論』は四八〇頁を一六〇頁で割ると三年となり、『俱舍論』は一二八〇頁を一六〇頁で割ると八年となる。いずれにしても、『唯識』と『俱舍』の分量の比は三対八となり、唯識三年と俱舍八年かかるという諺と合致している。

今はそれぞれの解読の難易度や思想内容の難易度や、章分けなどによる区切り方の相違など、すべてを度外視して単純に計算したが、これはあくまでも講読または講義などにかかる年数であって、これによって「唯識」や「俱舍」が三年ないし八年で理解され、すべてがわかるわけではない。大体、「唯識」でも「俱舍」でも難解であるから、三年や八年でその思想内容がすべて体得できるはずはない。

従って、これは『成唯識論』や『俱舍論』を、漢訳で解説・講義するときの一応の目安であったのではないかというのが私の考えである。

七 「唯識三年、俱舍八年」における解釈の相違

「唯識三年、俱舍八年」については、諸先生方の様々な意見があり、上山春平先生は、

「『唯識三年、俱舍八年』と言い慣わしがあるようだが、俱舍と唯識の両方に接してみた私の印象からすると

『唯識八年、俱舍二年』^⑬と言いたいくらいである」

といわれ、また「存在の分析（アビダルマ）」では、同じ上山先生が、

『桃栗三年、柿八年』の三年とか、八年とかいうのは、ほぼ正確な所要年限を示しているのだが、『唯識三年、俱舍八年』のほうは、ただ仏教哲学の基本を為す唯識と俱舍をマスターするにはかなりの年季を入れる必要があり、とりわけ俱舍は手間がかかるといったぐらいの意であろう¹⁴ともいわれる。

人によっては「俱舍々々三年、唯識八年¹⁵」という人もあるようだが、その気持ちはよくわかるが、あまり一般的ではない。

以上、「唯識三年、俱舍八年」の諺について考察してきたが、ここで面白いことに気がついた。というのは、唯識学者は唯識が難解なことを強調し、「唯識は八年または十一年かかる」というのに対して、俱舍学者は「唯識は三年かかり、俱舍は八年かかる」といって、「俱舍」の方が「唯識」より年季が要ることを強調している。

上山春平先生は「唯識」の著書の時には「『唯識八年、俱舍三年』と言いたいくらいである」といわれ、また「俱舍」の著書のとき¹⁷には「唯識と俱舍をマスターするにはかなりの年季をいれる必要があり、とりわけ俱舍は手間がかかる」といつておられる。

要するに自分の学問が如何に難解であるかを、それぞれの立場で論じているように思われる。私は唯識学者の末席をけがす者であるが、『成唯識論』十巻と『俱舍論』三十巻という文献の分量に注目して論じたにすぎず、「唯識三年、俱舍八年」をその言葉通り受け取ったので、唯識学者達からは、おしかりを受けるかもしれないが、その点については何卒、御容赦願いたい。

八 「俱舎宗」は「法相宗」の寓宗である

ところが「唯識三年、俱舎八年」という諺は一体、何時頃いわれるようになったのか、ということ調べているうちに、次のようなことがわかってきた。

私の祖父（舟橋水哉）が『俱舎の教義及び其歴史』の中で

「俱舎は諸教の基礎をなして居ると云われてある通り、唯識を学ぶにしても、俱舎に精通して居られねばならぬ、俱舎を八年間勉強せば、唯識は三年間の研究でよいという」¹⁸⁾

と述べている文章に出会った。これは私の予想、すなわち「俱舎学者は『唯識は三年かかり、俱舎は八年かかる』と解釈するだろう」というのとは全く異なる。私の祖父は俱舎学者であるので、俱舎学者の中からこのような言葉が出るとは全く予想もしていなかった。

そこで「俱舎宗は法相宗の寓宗である」といういい方を少し調べてみた。この考え方は相当古くからあるようで、もともと法相宗を学ぶために、基礎学としての俱舎を先に学んだようである。

私の手許にあった『八宗綱要講義』を少し見てみた。「佛教学会蔵版」と中表紙の見返しに印刷されているが、出版年時はわからない。その中に、稲葉円成師は「二八宗の今昔」の中で、

「初めから俱舎宗は法相宗に、成実宗は三論宗に附属して居った寓宗であった」¹⁹⁾
とか、また小島恵見師も「法相宗」の中で、

「法相宗は俱舎寓宗の本宗であって、これから後の宗旨は凡て大乘教である。……………之れは固より唯識を学ぶには俱舎を学ばねばならず、俱舎唯識の教理を明むるには是非とも因明の論理法を知らねばならぬ」²⁰⁾

と述べておられるし、舟橋水哉師も「俱舎宗」の項で、

「俱舎宗、そんな宗旨があるのかと思はるる人もあらうが、其は無理もない話、実はかういふ宗旨が独立して行はれたのではない。前にもあつた様に、寓宗とて法相宗に寄留して居つたもので、支那から我邦へ伝はるにも、やはり法相宗について来たのである」²¹⁾

と述べているから、俱舎宗が法相宗の寓宗として学ばれたことは明らかである。そういう点から「唯識三年、俱舎八年」の諺を解釈するのに、「俱舎八年を学んでおれば、唯識は三年で済む」という解釈も生まれてきたのであろう。

おそらく私の祖父は法隆寺へよく行つていたと聞くから、法隆寺で影響を受けてこの解釈をするようになったのではないかと思う。しかしながら、「唯識三年、俱舎八年」の諺が本来、そのような意で当初から使われていたかどうかについてはよくわからない。

私の祖父がいう「俱舎を八年間勉強せば、唯識は三年間の研究でよい」といっているのは昭和十五年刊の『俱舎の教義及び其歴史』（法蔵館）であるし、『八宗綱要講義』は出版年時が明らかでないが、古沢文龍師『禪宗並浄土宗』の記述の中に「大正四年を」（五一八頁）とあるから、大正四年以後に出版されたものである。

しかしながら、この『八宗綱要講義』の祖父の文中には、「俱舎宗……寓宗とて法相宗に寄留した居つた」²²⁾とあるが、「唯識三年、俱舎八年」については全く触れられていない。となると「俱舎を八年間勉強せば、唯識は三年間の研究でよい」というのは、私の見落しがなければ、今のところ昭和に入つてからの文しか見出されないことになる。とすると、それ以前（大正や明治）から、このような考え方があつたのかどうかよくわからない。

祖父の著書『印度佛教發達史』（大正三年刊）や『小乘仏教史論』（大正四年刊）や『異部宗輪論講義』（大正十年刊）などを見ても、このような記述は見あたらない。

以上、「唯識三年、俱舎八年」について、種々考察してきたが、何時頃からこのような諺が使われるようになったのか。誰が最初にこの諺を用いたかについて、今のところはっきりしない。今後の課題であると思う。

(なお、『印度学佛教学研究』(第四十六卷第二号)で、『唯識三年、俱舍八年』考と題してもっと詳しく論じているので参照していただければ幸いです。)

註

- ① 高橋直道博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8、唯識思想) 二頁参照。
- ② 拙著「初期唯識思想の研究」(国書刊行会、昭和五十一年)
- ③ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」五三九頁参照。S. Lévi: Mahāyānasūtrāṅkara p. 174, l. 16 参照。
- ④ 武邑尚邦博士「仏性論研究」(昭和五十二年二月刊、百華苑) 十五頁参照。
- ⑤ 『唯識二十論』の第一偈、第二偈については、かつてネパール写本を用いて論じたことがある。
拙稿「ネパール写本対照による『唯識三十頌』の原典考、並びに『唯識二十論』第一偈第二偈の原典について」(仏教学セミナー第43号)
- ⑥ R. Kondo: Daśabhūmīśvaro nāma mahāyānasūtram. 1983. p. 98, l. 8 参照。
- ⑦ S. Lévi: Viñāpimātrasiddhi p. 43
- ⑧ 拙稿「唯心と唯識」(仏教思想9、心) 一三八頁以下参照。
- ⑨ S. Lévi: Mahāyānasūtrāṅkara p. 63, l. 16. 参照。
- ⑩ Nagao Index による限り viñāpimātrata] は長行の部分のみに見出される。
- ⑪ 宇井博士は多分同時成立説である。『大乘莊嚴經論研究』序論二頁参照。
- ⑫ 高橋直道博士「瑜伽行派の形成」二頁参照。
- ⑬ 上山春平博士「認識と超越〈唯識〉」(仏教の思想4) 一頁参照。
- ⑭ 上山春平博士「存在と分析〈アピタルマ〉」(仏教の思想2) 一三八頁参照。
- ⑮ 上山・服部博士共著「認識と超越〈唯識〉」一七〇頁参照。
- ⑯ 注⑬参照。

- ⑰ 注⑭参照。
- ⑱ 舟橋水哉著「俱舎の教義及び其歴史」(昭和十五年刊、法蔵館) 一頁参照。
- ⑲ 『八宗綱要講義』(合著) 四頁参照。
- ⑳ 同書二〇二頁参照
- ㉑ 同書七十一頁参照
- ㉒ 注⑱参照。
- ㉓ 注⑲参照。
- ㉔ 注⑱参照。

(平成九年七月三十一日脱稿)